

幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業
成果報告書
(令和4年度～令和6年度)

機 関 名 : 大 館 市

1. 事業実施の目的

<事業実施の目的>

大館市では、就学前の子供たちが、どの施設にあっても質の高い教育・保育が受けられる指導体制づくりを目指して、平成21年度に福祉課（現在の子ども課）に保育アドバイザー（管理職）を設置し、すべての園への訪問指導、公開保育による自主的な研究会、市単独研修会の開催、各種書類や記録の共通様式の見直し等に取り組んできた。また、小学校への円滑な移行を視野に入れ、平成28年度からは、教育委員会に、幼保小連携アドバイザーを配置し、子ども課の保育アドバイザーとともに、園や小学校への訪問指導を開始している。この取組は定着し、設置主体の垣根なく子ども課や教育委員会の訪問を要請したり、互いに保育を公開し合ったりする土壌ができるなど一定の成果を得てきた。

現在、本市の就学前・小・中学校の連携は望ましい状況にあり、連続した育ちの中で小・中学生は、落ち着いた生活態度と安定した学力を維持している。年長児と小学校1年生という狭い接続だけではなく、0歳から22歳までの「未来大館市民」の成長過程に全ての教育・保育機関が協働して関わることを基本とする本市独自の教育理念である「ふるさとキャリア教育」を根幹とした人材育成に取り組んでいる。

本市では、おおだて型学力として、0歳～小学校低学年では、生涯を支える根っことなる「人間的基礎力」を育てるために、居場所がどこにあらうとも質の高い教育・保育が受けられるよう、福祉部子ども課と教育委員会が両輪となった指導体制を継続している。幼保小連携は、各園・校が実践してきているが、市として具体的なカリキュラムとして明文化、共有化には至っておらず、架け橋期のカリキュラム作成は課題となっている。

また、市教育委員会では全園・全小学校が参加する幼保小連携関連の研修会、園から大学までの教職員が参加できる研修会を、それぞれに年2回ずつ開催している。園と小学校は、小学校区毎に互いの保育・授業研究会に相互に参加したり、園児と児童との交流が年間行事に位置付けられており、連携の必要性や効果は実感されているが、交流内容の充実や子供の姿での検証などには課題が残っていた。



<園・小学校の施設数等>

(令和7年1月1日現在)

	幼稚園			保育所		幼保連携型 地域裁量型		認可外・ 事業所内		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数			1	5	5		8		11		17	
園児 児童数			25	396	228		751		155		2385	

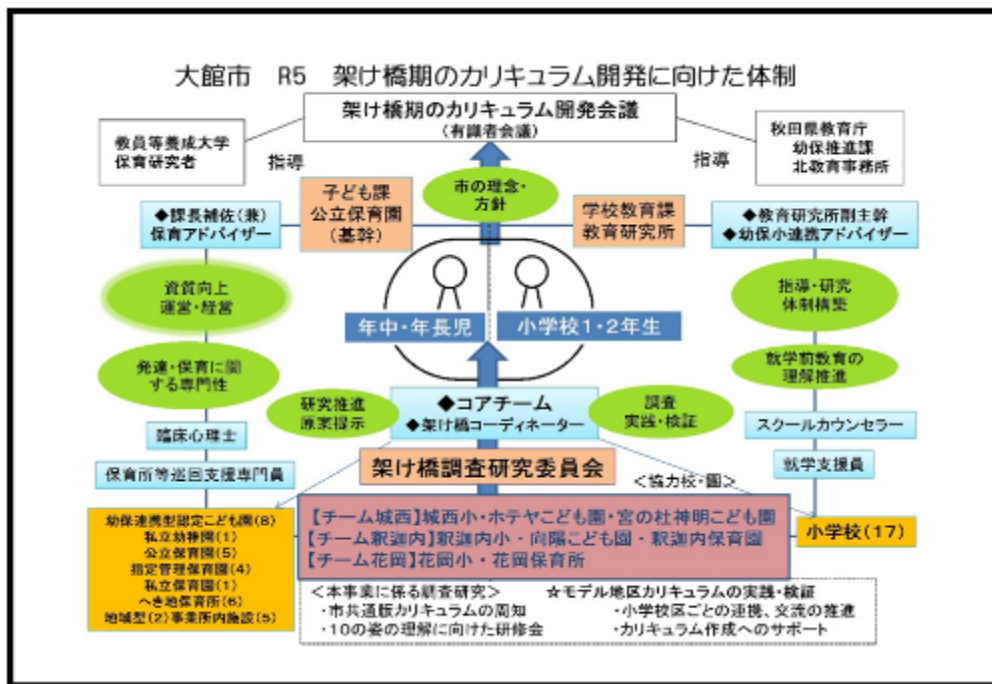
※公設民営は「私立」へ

2. 事業実施に当たっての体制づくり

2-1. 組織図・体制図

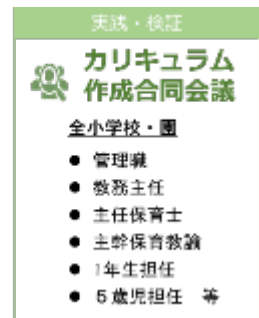
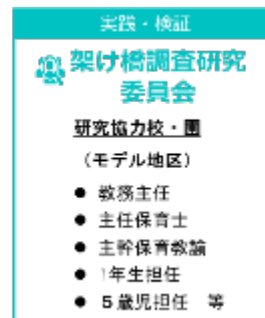
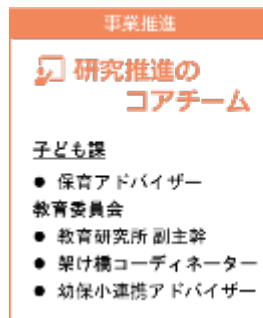
<組織図・体制図>

【研究推進の組織】



◆架け橋期のカリキュラム開発会議（有識者会議）

保育者養成大学の学長、県教育庁幼保推進課指導担当といった有識者で構成。架け橋期のカリキュラムの開発等について市の理念・方針や研究の方向性、カリキュラム作成や各モデル地区の研究の進捗状況について助言、協議する会議体。



◆コアチーム

日頃、園や小学校へ訪問したり、指導したりする教育委員会と福祉部子ども課の4名が市としての研究を推進するチーム。

- ・研究の原案、指導資料の作成
- ・市共通版カリキュラム、小学校区版の枠の作成
- ・関係する研修会の企画・運営
- ・他自治体からの視察への対応
- ・モデル地区への訪問指導、取材
- ・各小学校区版カリキュラムへの指導
- ・広報誌の発行

◆架け橋調査研究委員会（3モデル地区）

モデル地区の園と小学校の関係者からなる実務者会議。先行事例としてのカリキュラム作成、調査研究。

◆カリキュラム作成合同会議（モデル地区以外の小学校区）

園と小学校の関係者からなる実務者会議。自小学校区版カリキュラムの作成、調査研究。

【体制作り】 教育委員会と福祉部局は平成28年度から訪問指導、研修の共同実施等で連携が図られていた。

◆担当部局

- ・教育委員会教育研究所（副主幹）～小学校の指導、幼保小連携関係の研修企画
- ・福祉部子ども課（課長補佐）～園の指導、園対象の研修企画

2-2. 協力園・協力校

<協力園・協力校の概要>

【令和4・5年度】

※令和4年度5月1日の在籍数

設置者	施設類型等	園名・校名	幼児・児童数等	接続園・校のグループ
私立	幼保連携型	大館ホテヤこども園	151名（5歳児：31名）	A
私立	幼保連携型	宮の杜神明こども園	76名（5歳児：16名）	A
公立	小学校	大館市立城西小学校	254名（小1：47名）	A
私立	幼保連携型	向陽こども園	58名（5歳児：11名）	B
私立	保育所	釈迦内保育園	68名（5歳児：16名）	B
公立	小学校	釈迦内小学校	192名（小1：26名）	B
私立	認可外保育施設	花岡保育所	9名（5歳児：5名）	C
公立	小学校	花岡小学校	53名（小1：4名）	C

【令和6年度】

設置者	施設類型等	園名・校名	幼児・児童数等	接続園・校のグループ
私立	幼保連携型	大館ホテヤこども園	142名（5歳児：33名）	A
私立	幼保連携型	宮の杜神明こども園	101名（5歳児：24名）	A
私立	幼保連携型	ホテヤ第2こども園	59名（5歳児：10名）	A
公立	小学校	大館市立城西小学校	255名（小1：57名）	A
私立	幼保連携型	向陽こども園	50名（5歳児：10名）	B
私立	保育所	釈迦内保育園	65名（5歳児：17名）	B
公立	小学校	釈迦内小学校	170名（小1：21名）	B
公立	小学校	花岡小学校	35名（小1：3名）	C

※ 花岡保育所は令和6年3月で閉園

<協力園・協力校の指定プロセス>

○選定について 教育委員会と子ども課が協議し、以下の条件から3小学校区を選定。

- ・ 学校規模の「大」「中」「小」から。
- ・ 園は私立の認定こども園、保育所、認可外保育施設から。（比較的連携しやすい公立園を除く）
- ・ 地域性の違う小学校区から。

○指定について

- ・ 施設類型ごとの組織・団体に事業の内容と本市における必要性を説明し、協力を求めた。その中で、協力園・校には、それぞれ出向き、説明と協力を依頼した。

○私立認定こども園への協力依頼

- ・ それぞれのこども園の教育方針は尊重することを前提に、市として架け橋期に育てたい子供の姿を共有することで理解・協力を求めた。
- ・ 協力園からは、当初は、人手不足から研修や会議に頻繁に派遣することは難しいと言われ、代替え職員の派遣も予算化はしたものの、研究がスタートすると、どの園の委員も主体的に研究に関わり、結果的には全面的に協力・参加してくださった。

＜自治体と協力園・協力校の連携・協働の取組＞

- ・協力園と行政が互いの顔が見えることを重視し、教育委員会関係職員 4 名が通知や幼保小連携便りの配付はメールではなく、あえて直接伺うようにした。実際、月に複数回は園を訪問することで、5 歳児の育ちのエピソードや、小学校との連携の大変さや課題が炉辺談話で本音として聞くことができ、課題に対しては、すぐに対応するようにした。また、園行事や小学校との交流活動の近々の予定の情報を得ることができ、「時間があったら見に来てください。」と声をかけてもらえるようになっていった。教育委員会ができるだけ訪問や参観をさせてもらい、その様子をお便りに記事として掲載するなど、各園での好事例、実践、エピソードには事欠かない状況であり、園同士も施設類型を越えて互いの保育の様子を知ることにつながり、様々な情報共有ができた。
- ・園が小学校へは直接伝えられない場合、教育委員会が小学校へつないだり、小学校の承諾を得たりする仲立ちをすることは重要な役割となった。

＜協力園と協力園同士の連携・協働の取組＞

- ・同じ小学校区の園同士であっても、私立と公立、私立と私立ではこれまで交流がほとんどなく、互いの園の様子を知ることがなかった。間に小学校が入ることで、カリキュラム作成というテーブルにつくことができ、複数回にわたる話合いや作業を重ねる中で、関係性が築かれていった。
- ・互いの園のカリキュラムを摺り合わせる中で、互いの園の特色や行事、生活の様子を知ることとなった。行事の時期ややり方などの情報交換をしていくうちに、自園の「当たり前」や「既成概念」にこだわる必要がないことに気付き、行事の持ち方を変更したり、互いのアイデアを取り入れたりすることにつながった。
- ・小学校の課題である「メディアコントロール力の育成」の調査研究で、小学校の養護教諭や校長、生徒指導主事等から、幼児期から取組を始めたいという依頼があり、私立のこども園と公立の保育所と小学校が 1 つの研究グループとして、保護者への啓発活動、実態調査、小学生が園児に啓発活動をするなどの取組が次々と生まれ、園も学校も共同研究の成果を実感することができた。
- ・小学校の行事に、複数園が声をかけてもらい参加することが増えるにつれ、園同士の関係性もでき、そこから新たに園同士の交流のアイデア（ドッチボール対抗、綱引き大会、焼きいもパーティー等）が生まれ実現に到った。5 歳児の育ちにおいて、同年齢との交流や競争は刺激となり、「勝つための作戦タイムは、どちらも真剣そのものだった。」「その後の遊びや生活への影響が大きかった。」「園同士の交流は不可能だと思っていたが、意外にやればできる。」「考えてみれば、同じ小学校に入る仲間だから、1 年生になってからの友達関係にもよいと思う。」という肯定的な声が多く聞かれた。



焼きいもパーティーで交流する
こども園と保育所の 5 歳児



綱引き競争をするこども園 3 園
の 5 歳児



2－3. 協力団体等

<協力団体等の概要>

関係団体	団体等の活動概要
公立保育園主任会	市の基幹保育園となる5公立保育園が、公開保育や研修会の企画等、研究推進の役割を担っている。
私立学校協議会	私立幼稚園から幼保連携型認定こども園に移行した8園と私立幼稚園1園の園長による協議会
へき地保育所長会	公設民営の認可外保育施設5園の所長による協議会
指定管理保育園主任会	公設民営の認可保育所4園の研究推進を担う主任による会
大館市教育研究会生活科部会	小学校生活科の研究組織。授業研究、実践事例研究等を行う。

<各協力団体等との連携>

- ・関係団体には、事業内容の周知と協力依頼が中心となった。モデル地区だけではなく、市内全園・校が取り組むことを依頼するために、代表者会や総会などの場を借りて説明した。
 - ・既存の研究会を広く架け橋プログラムの関係者にも提供してもらい、共に研修する機会を得ることができた。小学校の生活科部会の研究会には、全園に案内し、授業のみならず研究協議にも参加できるよう受け入れを要請した。小学校の研究授業に参加することで、子供の育ちだけではなく、授業のねらいの設定や評価の視点の持ち方に相違があることに気付くなど、互いの研究文化に触れることはよい刺激となった。
- ▲生活科部会には園側の関心が高く、小学校の参加者数を上回る参加となったことで、小学校側の戸惑いを感じられた。次年度からは、参加者数を制限したり、公開校の近隣の園や就学予定の園に限定するなどの調整を図った。また、小学校の研究会参加には、架け橋コーディネーターが世話人的な役割を果たした。

2-4. 架け橋期のコーディネーター等

<架け橋期のコーディネーター等の概要>

新規／継続	事業に関わった年度	役職名	経歴
継続	令和4～6年度	架け橋期のコーディネーター	元公立小学校長、幼保小連携アドバイザーとして保育指導の経験あり

<架け橋期のコーディネーター等の役割等>

【選定・任命】

- ・事業開始時に教育研究所の幼保小連携アドバイザーが適任であると考え、年度途中から架け橋コーディネーターに任命した。
- ・小学校教諭・管理職の経験と、校長退職後の幼保小連携アドバイザーとしての園への指導実績から、小学校と園の双方に信頼関係があった。

【役割・業務内容】

- ・小学校区内の園と小学校との交流（子供同士・職員同士）をコーディネート
- ・各園・小学校を訪問しての実態把握、エピソード収集
- ・市共通版のカリキュラム原案作成、各小学校区作成カリキュラムのフォーマット作成
- ・市内で情報を共有するための幼保小連携だより「つなぐ」の作成（月1回）
- ・架け橋調査研究委員会、カリキュラム作成合同会議への出席、指導助言
- ・カリキュラムの作成・検証、評価の手順やポイントを示したり、カリキュラム作成合同会議の進め方を事前に助言
- ・他自治体の視察訪問の受入、資料提供

【成果と課題】

- 幼保小の交流や会議を新たに増やすことには園も小学校も抵抗が大きいですが、架け橋コーディネーターが、双方の立場、行事や研究会を把握して、それぞれに参加を促すなどのコーディネートをすることで、無理なく実施でき、交流の内容も充実したものになった。
 - 園側が小学校に依頼しづらい場合には、小学校管理職に代理で伝えるなど、互いの心の垣根を取り払う一助となった。
 - 架け橋コーディネーターが、全17小学校区の交流活動やカリキュラム作成合同会議に出席し、カリキュラム作成途中でも随時、指導助言をして完成までをサポートした効果は大きい。
 - 架け橋コーディネーターが、各小学校区の進捗状況を他小学校区へ情報提供する機会が多く、それぞれのカリキュラム作成合同会議が安心して見通しをもって取り組むことができた。
 - ▲架け橋コーディネーターが全17小学校区に複数回関わることから負担が大きくなり、時間外勤務が多くなった。
- 令和7年度以降は、訪問対象を新たな2モデル地区を中心として限定する。

３． 架け橋期のカリキュラム開発会議

３－１． 会議委員等

<会議委員一覧>

ふりがな 会議の代表者氏名		たかはし よしゆき 高 橋 善 之	他 11 名（実人数）
会議委員氏名	所属機関 所属・職名	具体的な役割分担	従事期間
島内 智秋	柴田学園大学短期大学部 学長・教授	座長として、全体的な指導助 言。カリキュラム開発の総括的 指導。	令和 4 年 8 月 2 4 日 ～ 令和 7 年 3 月 3 1 日
武石 郁子	秋田県教育庁幼保推進課 主任指導主事	研究協力園のカリキュラムに関 する指導助言	令和 4 年 8 月 2 4 日 ～ 令和 7 年 3 月 3 1 日
岡部 賢哉	秋田県教育庁北教育事務 所 指導主事	研究協力園の保育実践に関する 指導助言	令和 4 年 8 月 2 4 日 ～ 令和 7 年 3 月 3 1 日
* 花田 一雅	モデル地区城西小学校長	就学前教育を踏まえた小学校低 学年の授業改善	令和 4 年 8 月 2 4 日 ～ 令和 6 年 3 月 3 1 日
* 川崎 郁子	モデル地区城西小学校長	就学前教育を踏まえた小学校低 学年の授業改善	令和 6 年 4 月 1 日～ 令和 7 年 3 月 3 1 日
浅野 直子	モデル地区花岡小学校長 ↓ 桂城小学校 校長	座長を補助し、会議の進行。就 学前教育を踏まえた小学校低学 年の授業改善	令和 4 年 8 月 2 4 日 ～ 令和 7 年 3 月 3 1 日
鎌田 晴美	大館市福祉部子ども課 課長補佐（保育アドバイ ザー）	市内教育・保育施設の保育改善 に向けた指導	令和 4 年 8 月 2 4 日 ～ 令和 7 年 3 月 3 1 日
日景 陽司	私立認定こども園長 （向陽こども園）	保育実践の提供とカリキュラム の検証	令和 4 年 8 月 2 4 日 ～ 令和 7 年 3 月 3 1 日
布袋屋 幸穂	私立認定こども園長 （ホテヤこども園）	保育実践の提供とカリキュラム の検証	令和 4 年 8 月 2 4 日 ～ 令和 7 年 3 月 3 1 日
* 田中伊津子	花岡保育所長	保育実践の提供とカリキュラム の検証	令和 4 年 8 月 2 4 日 ～ 令和 6 年 3 月 3 1 日
高橋 敦子	公立保育園長 （扇田保育園）	保育実践の提供とカリキュラム の検証	令和 4 年 8 月 2 4 日 ～

			令和7年3月31日
* 岩谷 佳生	保護者 (モデル地区在園・校)	保護者としての立場からの意見	令和6年4月1日～ 令和7年3月31日
山本 多鶴子	大館市教育研究所 副主幹	事務局総括。カリキュラムの編集責任者。小学校低学年の授業改善に向けた指導、研究成果の普及、発信。	令和4年8月24日 ～ 令和7年3月31日

＜会議委員の決定プロセス＞

【設置のプロセス】

- ・ 会議は本事業のために新設。これまでは、校種や所管を越えた会議体はなかったため。
- ・ 設置に当たっては、教育委員会が「設置要綱」を作成し、委員委嘱をした。

【委員選定の観点】

- ・ 委員数は、協議しやすく全委員から意見をもらうために10人前後に設定
 - ◆有識者・・・研究の方向性に助言ができる専門的な立場（保育養成大、秋田県教育庁幼保推進課）の方に依頼
 - ◆関係団体代表・・・これまで関係性が薄く、協力・連携しにくかった団体から委員を推薦してもらい、依頼
 - ◆モデル地区代表・・・調査研究の進捗状況や感想・意見を生の声で伝えてもらうために依頼。モデル小学校区から1名ずつ選定。
 - ◆保護者代表（3年目）・・・モデル地区の園と小学校に子供が在籍している保護者（父親）に依頼。これまでも、園や小学校での交流会後の反応や感想を寄せてくれるなど、本事業に関心が高い保護者。

3－2. 開催実績

＜開催実績＞

令和4年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
8月24日 15時～16時30分	・ 委嘱状交付、教育長挨拶 ・ 事業概要説明、事業の進め方 ・ 協議	各委員に委嘱状が交付された。事務局が事業内容(進め方も含む)、組織、カリキュラム等の説明を行い、それを受け協議を行った。
1月25日 14時～16時	・ 事業経過報告 ・ 成果物、事業の発信について ・ 来年度の計画	市の全体計画、成果物等の報告を行った。カリキュラム作成手順や方向性について、各モデル地区の取組、作成状況についての報告も上げられた。
2月28日 14時30分～ 16時30分	・ 事業経過報告 ・ 来年度の事業内容について ・ 指導助言	今年度の成果と課題について協議を行った。モデル地区、モデル地区以外の来年度の事業内容についても報告があった。

令和５年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
6月20日 15時～16時30分	・委嘱状交付 ・事業概要説明と協議 ・今年の研究についての助言・意見	架け橋カリキュラムの作業手順や内容、具現化について検討を行った。今年の研究について、各委員から助言や意見が出された。
1月16日 13時30分～15時	・事業概要説明、協議 ・成果と課題(中間報告) ・今年の研究についての助言・意見	市共通版のカリキュラムについて協議を行い、事業の進捗状況(授業・保育改善の取組等)や成果と課題の報告も上げられた。
2月26日 13時30分～15時	・事業報告 ・意見交換 ・今年度の事業についての指導助言	各委員から、今年度の事業の成果、最終年度に向けての意見が出された。
令和６年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
6月11日 15時～16時30分	・委嘱状交付 ・事業概要説明と協議 ・今年の研究についての指導助言	新副委員長が選出された。研究の検証方法や家庭教育への周知・啓発、今後の展開について検討された。
1月17日 10時～11時45分	・事業報告 ・協議 ・今年度の研究についての指導助言	検証結果について、小学校区の取組等の報告が上げられた。「架け橋カリキュラムで何が変わったか」をテーマに協議を行った。
2月25日 15時～16時30分	・教育長御礼の挨拶、事業報告 ・協議 ・事業の総括、指導助言 ・令和７年度のしとしての研究体制	「成果と課題を踏まえた来年度以降の実践に向けて」をテーマに協議を行った。委員長より3カ年の総括と指導助言があった。
◆会議の一般公開 ・令和５年度 ３回目（２１名） 市内全園・校への案内通知 ・令和６年度 １回目（１３名） モデル地区（研究協力園・校にオブザーバー参加の案内） ・ ２回目（２９名） 市内全園・校、県内自治体への案内通知 ・ ３回目（１２名） モデル地区（研究協力園・校にオブザーバー参加の案内） * 委員以外の参加者からも発言や感想があった。 ◆会議の時間 ・会議の平均時間は１時間３０分の設定であるが、協議の内容によって時間設定を変えた。		

3-3. 成果と課題

◆委員の構成

○多様な立場の委員を選定することができ、多面的に意見を出し合えたのはよかったが、当初はそれぞれの立場からの意見やそれぞれが感じている課題がかみ合わず、市全体として議論を焦点化することができなかった。モデル地区の実践が進み、具体的な事例から議論を重ねる中で、市としての共通する課題が見えてきて、本事業で市が目指すべき方向性が明確になっていった。

- ・5歳児と1年生だけの取組にせず、市としては4歳児から2年生までを広く架け橋期とする。
- ・モデル地区から課題にあげられた「言葉による伝え合い」が市全体でも課題である。市が目指す「共感的協働力」を育成するためには、それぞれの小学校区内で「言葉による伝え合い」を「共通して充実を目指す活動・体験」に入れて実践する必要がある。
- ・多様な価値観をもつ保護者が多くなり、子育ての大切さを園や小学校、行政が一体となって伝える絶好の機会である。

○委員の構成が、人事異動を経ても2年間は全く同じ顔ぶれであり、結果として委員全員の理解が同一歩調で進んだことが、2年目の最後に「公私や校種を越えて、大館の子供をみんな育てていく」という意思の統一に到った。

○2カ年の取組で、保護者や家庭、地域を巻き込む手立てが課題として残ったことから、3年目には保護者代表も委員に加えた。保護者ならではの視点に気付かされることが多く、次年度から取り組むべきことが明確になった。

◆カリキュラムについて

○カリキュラムのフォーマットや、市共通版カリキュラムについては、カリキュラム開発会議の場で説明をして若干のご意見をもらうなどしたが、その後、各委員の所にコアチームが出向き、じっくりとご意見をもらったり、指導助言を受けたりした。詳細部分まで指導をもらい、何度も修正を繰り返し、モデル地区やモデル地区以外へひな型として提示することができた。

○1年目の最後には、モデル地区の取組を市内全小学校区に広げるに当たり、カリキュラムの完成度は50%を目指し、その後、活用しながら修正し、より実態に合ったものへと完成度を上げていく。」という方針となった。これによって、モデル地区はもちろん、それ以外の地区でも気負わず安心して取り組めることにつながった。

◆会議の公開

○幼保小連携だよりでカリキュラム開発会議での議論について伝えてはいたものの、一般傍聴者が参加することで、委員の熱意あふれるやりとりや市全体の研究の進捗状況、各委員からの指導助言を直に感じ取ることができ、理解推進には効果が大きかった。会議終了後に参加者からは、「よい刺激になった。」「自小学校区はもっと頑張らなければならない。」等の声が聞かれた。

○地元地方紙の取材により記事にしてもらうことで、関係者以外に広く市民にも取組を周知することができた。

<会議設置による成果と課題>

○本会議の設置時に、研究の方向性やカリキュラムの具体が見えていたわけではなかったが、多様な立場の委員と本市の子供の育ちと教育が担うべき役割について協議する中で、事業の目的・カリキュラムの必要性が委員一人一人に実感され、共有化されていった。

○協議により、本市の架け橋期の課題が明確になり、園や小学校に可視化して伝えることで、やるべきことが具体的になった。

- 本会議を通して、架け橋期の育ちの重要性、「子どもも大人も共に育ち合う」意識が醸成され、発信することができた。
- 少子化により想定外に廃園が進み、小学校区の組み合わせが変わったり、年度の人事異動でモデル地区内の研究体制が変わったりと研究推進上の課題が発生した場合にも本会議に提案し、助言を得ることができた。
- 委員（園長）が本事業の意義や価値を認識し、覚悟をもって取り組んだことにより、これまでできないと思っていた横のつながりや交流、改革の実現につながった。園と園との横の交流の突破口となり、その好事例が他地区にも広まっていった。
- 3カ年にわたる本会議の議論を通して、「少子化となっている今、子供が保育所、こども園にしようとも、「大館の子供」として区別なく育てていくべき。そのためには施設類型や校種を越えての連携・協働は必要である」という本市がこれからも架け橋プログラムを教育の重点として位置づけていくことを結論として導くことができた。
- ▲年に3回の短時間での開催であることで議論の焦点が拡散しがちになる。テーマを設定し、各委員に求める意見を事前に打ち合わせておくことで論点がずれない会議となっていた。
- ▲ほぼ全員出席で開催できたが、委員の都合と研究の進捗状況を見合わせて日程を調整するのが難しかった。
- ▲事業終了以降の本会議については、名称を「架け橋プログラム会議」と改称して継続させていく。委員の再編、予算のかからない方法を来年度に向けて検討していく。



初年度 第1回カリキュラム開発会議

教育長から本市の教育における架け橋期の
保育・教育の重要性と委員委嘱の依頼



2年次

第3回カリキュラム開発会議

市内から一般傍聴の参加者
を交えての意見交換

4. 架け橋期のカリキュラム

4-1. 開発プロセス

【カリキュラム作成の基本方針】

- ・本市では4歳児から小学校2年生までを架け橋期と捉える。
- ・小学校への適応を急ぐのではなく、就学前の学びや体験の延長線上に、発達特性に応じた学びを積み上げる。
- ・学びの喜びや楽しさを実感できるよう子供の意欲や期待に応える保育・授業を展開する。
- ・すべての学習の土台となる「ことば」「言語活動」における伸びしろを十分引き出す教育・保育実践を大切にす。

【作成に当たって】

- ・園と小学校が、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「10の姿」を共通言語に同じ子どもたちの姿から育ちを語り合う。
- ・3つの資質・能力をベースに、幼保小が同じ方向性をもった「ねらい」、それに基づいた活動や体験を設定する。

【コアチームによる作成までの準備】 1年次

- ・研究推進のコアチームが市内園・小学校の保育・授業を参観し、実態把握、事例収集をする。
- ・市としての課題の明確化し、市としての方針（案）を設定する。
- ・市としての共通カリキュラム（素案）を作成する。
 - * 架け橋充実期（年長10月～小1年生7月）
- ・具体的な環境構成と援助、カリキュラムの展開例を作成する。
- ・研究協力校・園（モデル地区）の授業・保育の映像を資料化する。
 - * 事業の具体を周知する映像資料として
 - * 具体的な場面や子どもの姿から、カリキュラムを検証する研修用教材として
- ・架け橋期の保育・教育にふさわしい援助・指導が積み重ねられ、市内のどの園・小学校にいても発達に必要な経験（生活、保育・授業）が保障されるためには、一貫したカリキュラムが必要であることの理解促進をする。

【作成のスケジュール】

- ・3カ年で市からモデル地区へ、モデル地区から全小学校区へとひな型を提示して段階的にカリキュラム作成を進める。
- ・カリキュラム作成の作業は、5歳児10月から1年生7月までを「架け橋充実期」と設定して、園と小学校が演習的に一緒に作業する。

	1年目	2年目	3年目
市共通版	▶ 架け橋充実期 (5歳児10月～1年生7月) ▶ 架け橋期 (5歳児4月～1年生3月)	▶ 4歳児～ 小学2年生 ▶ 検証・評価	▶ 改善
モデル地区版	▶ 架け橋充実期 (5歳児10月～1年生7月)	▶ 実践 ▶ 架け橋期 (5歳児4月～1年生3月)	▶ 実践・検証・ 評価
各小学校区版		▶ 架け橋充実期 (5歳児10月～1年生7月)	▶ 架け橋期 (5歳児4月～1年生3月)



【作成のプロセス】

- ① 互いの保育・授業を参観・体験し、「子供の姿」を通して協議し、子供の発達や互いの指導方法について理解を深める。
 - ・実際の保育や授業を参観したり、体験をしたりし、その後、付箋に書き出した子供の実態から見える成果と課題を協議する。
- ② 子供の実態から、小学校区の良さや強み、課題を明確にして「期待する子供の姿」「共通の視点」を設定する。
 - ・共通の課題が見出されると互いの心の距離が一気に縮まり、共通する課題を解決するために具体的にどのような活動が必要かというアイデアも生まれやすく、それをカリキュラムに位置付けていく。
 - ・共通する課題が見出されるよう架け橋コーディネーター等が協議を軌道修正したり支援したりする。
- ③ カリキュラムの中に「目指す子供の姿」「具体的な活動・体験」を位置付ける。
 - ・架け橋充実期から着手し小学校も園も一緒に作業することで、5歳児から1年生への継続、一貫性が出てくる。また、カリキュラム作成の演習としても、特定の時期から手がけることは、負担感の軽減にもつながった。
 - ・「共通の視点」に向けて、これまでの園のカリキュラムにある遊びや体験を互いに出し合う中で、「共通して目指す活動・体験」を決める。
 - ・「環境の構成や援助・支援」「家庭との連携」を記入する。
 - ・家庭や地域への周知方法や小学校区として家庭と共にこれまでも力を入れてきた実践なども示す。
- ④ 同様の手順で、5歳児の前半・1年生の後半のカリキュラムを作成する。

【カリキュラム作成の留意点】

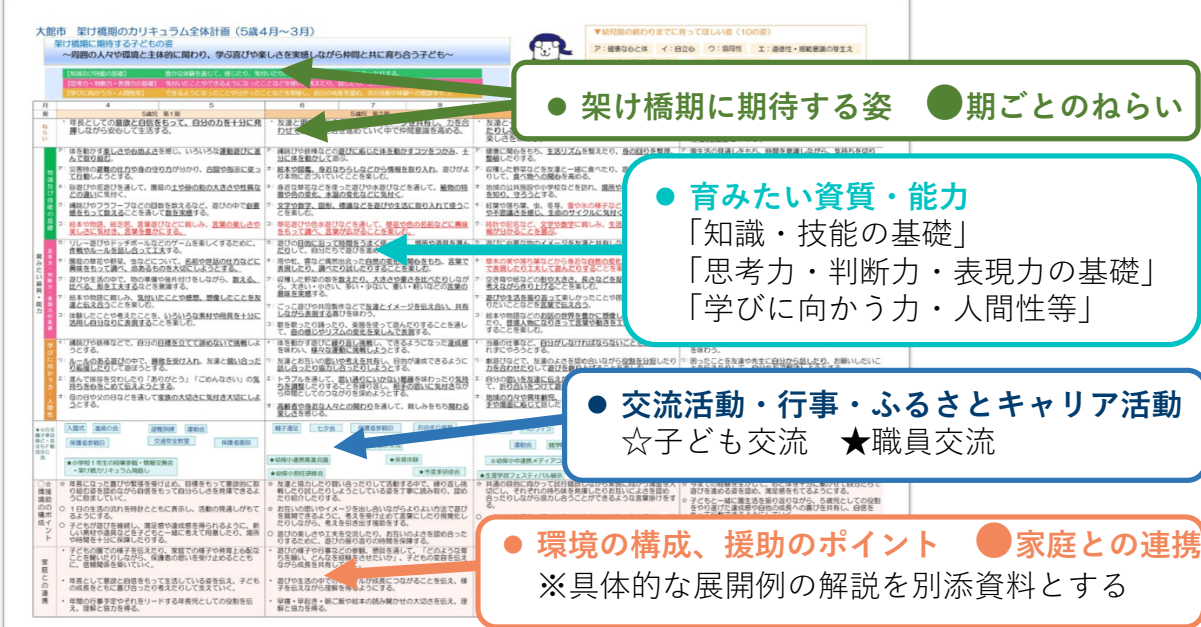
- ・ひな型のカリキュラムを参考にして取り入れてもよいし、様式の項目やデザイン、記号やマークなどは小学校区で変更も可能とする。
 - *作業しやすいように、様式やひな型となるカリキュラムは全園・校へデータで送付する。
- ・小学校がカリキュラムの内容など全てにおいてリーダーシップをとってしまい、園側が発言できないような雰囲気を作ることは避けたい。また、作業効率のためそれぞれが作成して持ち寄るというスタイルも避ける。
- ・市共通版の4歳児・2年生のカリキュラムを参考にして、5歳児の前半は4歳児からのつながり、1年生は2年生へのつながりを意識して考える。

4-2. 架け橋期のカリキュラムの概要

【概要・ポイント】

◆市共通版

- ・市の重点である「共感的協働力」の育成に向けて、4年間を貫く3つの「育みたい資質・能力/身に付けたい資質・能力」で育ちを表す。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を明記する。
- ・「言葉による伝え合い」を発達の段階に応じて明示する。



● 架け橋期に期待する姿 ● 期ごとのねらい

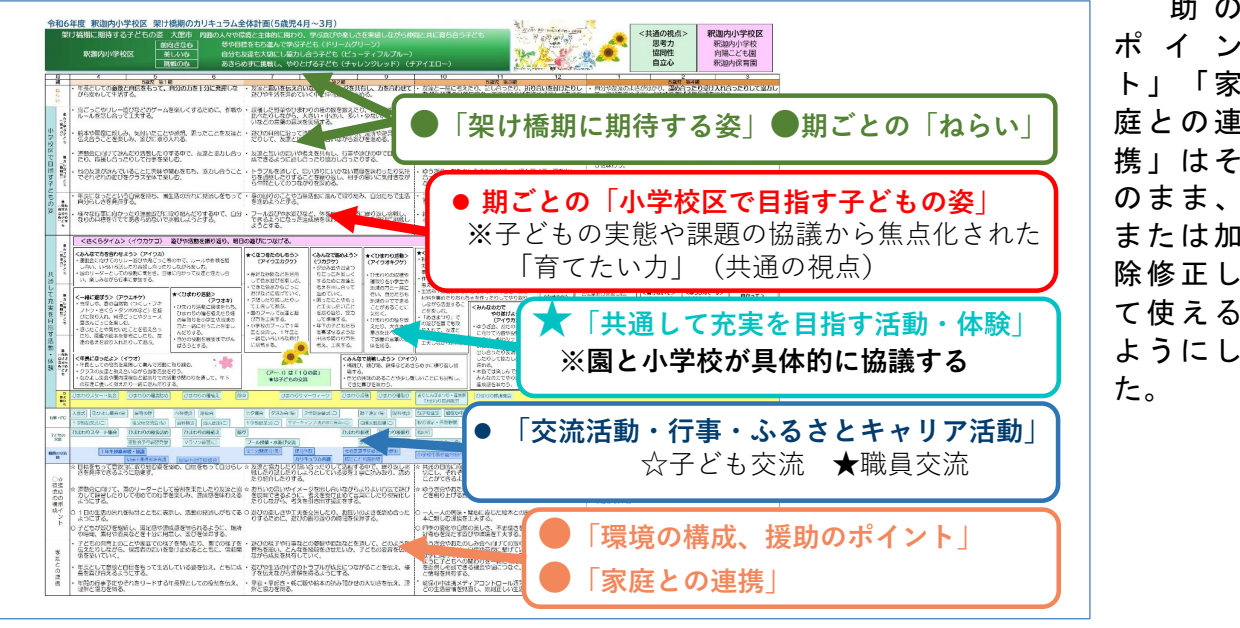
● 育みたい資質・能力
「知識・技能の基礎」
「思考力・判断力・表現力の基礎」
「学びに向かう力・人間性等」

● 交流活動・行事・ふるさとキャリア活動
☆子ども交流 ★職員交流

● 環境の構成、援助のポイント ● 家庭との連携
※具体的な展開例の解説を別添資料とする

【小学校区版】

- ・各小学校区の子供の育ちの課題を共有化した「共通の視点」に基づいて、焦点化してねらいを設定する。
- ・その中でも重点化したい「目指す子供の姿」には、マークをつけるなど意識できる工夫をする。
- ・作業用の様式では、「共通して目指す活動・体験」を空欄にしており、その部分から話し合いを始めるようにする。市共通版同様の「育みたい資質・能力」「環境構成の構成、援助の



● 「架け橋期に期待する姿」 ● 期ごとの「ねらい」

● 期ごとの「小学校区で目指す子どもの姿」
※子どもの実態や課題の協議から焦点化された「育てたい力」（共通の視点）

★ 「共通して充実を目指す活動・体験」
※園と小学校が具体的に協議する

● 「交流活動・行事・ふるさとキャリア活動」
☆子ども交流 ★職員交流

● 「環境の構成、援助のポイント」
● 「家庭との連携」

助の
ポ
イ
ン
ト
「家
庭
と
の
連
携」
は
そ
の
ま
ま、
ま
た
は
加
除
修
正
し
て
使
え
る
よ
う
に
し
た。

【既存のカリキュラムとの相違点】

- ・園の5歳児年間指導計画、アプローチカリキュラムについては、自小学校区の架け橋期のカリキュラムとの整合性を図る作業を通して若干の修正となった園、数年同じ計画を使っていたために今回を機会に大幅に改善した園とがあった。
- ・小学校には架け橋期のカリキュラムに類似する計画はなかったため、新たに作成するものとなった。そのため、各教科の年間指導計画との関連性や、合科的な単元構成を考える上での説明を必要とした。
- ・架け橋期のカリキュラムを具体的に日々の生活や授業に生かしていくためには、スタートカリキュラムの存在が重要であることを再認識し、市としてスタートカリキュラムの考え方を手引きとしてまとめ、現1年生担任に来年度の原案作成を依頼した。様式自体はあまり変わらないが、これまでの入学期に教えなければならない事項を羅列するカリキュラムから意識を変えなければならず、新年度の研修内容に盛り込むこととする。

4-3. 架け橋期のカリキュラムの実践

【年度始め】

- ① 年間指導計画やアプローチカリキュラム、スタートカリキュラムの「目指す子供の姿」や活動のねらい等を「架け橋期に期待する子供の姿」を基に見直し、重点化する。
 - ・これまで園・小学校で活用していたカリキュラムと架け橋期のカリキュラムの整合性を図るために市全体での研修会や希望する園へ個別に支援するなどした。

【1学期～夏休み】

- ② 「共通して充実を目指す活動・体験」を実践し、保育・授業参観、カリキュラム作成合同会議で検証する。
 - ・合同会議で「共通の視点」を確認し合い、活動・体験の意図を共有する。
 - ・保育・授業参観や体験を通して、子供の学びのつながりや実態、教職員の関わり方を共通理解し日常的に実践する。
 - ・実際の活動・体験がカリキュラムとは違ってくるため、柔軟性をもたせた活動名やテーマへ変更するなど、より現状に沿った修正が加えられた。

- ③ 作成したカリキュラムに変更点や改善点を書き込んだり、付箋で記したりして、次年度の改善に役立てる。

【2学期～冬休み】

- ④ 交流活動を実施し、ねらいに沿った活動内だったか、カリキュラムに明示した姿が見られたか等を検証する。
- ⑤ カリキュラム作成合同会で、カリキュラムの内容が、子供の実態や「共通の視点」に沿っていたか、各項目の整合性をチェックする。

【3学期】

- ⑥ カリキュラムを園内・校内で再検討し、修正箇所等の摺り合わせをし、小学校が最終的にデータを取りまとめ、完成とする。
 - ・交流活動には、「子供同士」「職員同士」を明示していたが、新たな取組により「園同士」の交流活動も加えた。

5. 自治体の支援

5-1. 研修の実施

<実施した研修の概要>

令和4年度

実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
5月16日	幼保小連携推進会議	対面	副園長・主幹教諭・主任、教頭・養護教諭等	「効果的な幼保小連携について」の講話。「生活習慣の確立について」の取組の発表と協議。
5月31日	幼保小担任研修会	対面	5歳児・小1担任、養護教諭等	「育ちや学びの連続性をふまえた円滑な接続について」の講話と協議。
8月3日	大館市教職員夏季研修会	対面	大館市教職員、園職員等	「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を意識した乳幼児期からのカリキュラムについて」の講話。
10月21日	大館市教育研究会生活科部会	対面	園職員、小学校職員等	小学2年生の生活科授業の参観・研究協議。
1月6日	大館市教職員研究実践発表会	対面	大館市教職員、園職員等	公立保育園（2園）の実践発表。
1月27日 30日	大館市保育実践発表会	対面	園職員、小学校職員等	「幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究について」の講話。公立保育園（2園）の実践発表。



幼保小連携推進会議
（5月開催）

事業説明と
小学校区ごとの協議



幼保小担任研修会（5月開催）

事業説明と幼保小共通テーマ
として生活習慣について養護教諭からの発表

令和5年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
5月17日	幼保小連携推進会議	対面	副園長・主幹教諭・主任、小学校教頭等	「幼保小の架け橋プログラムの大館市の取組状況について」の講話。「架け橋期のカリキュラム作成の年間予定・交流計画」について小学校区ごとの協議。
6月1日	幼保小担任研修会	対面・オンライン	5歳児・小1担任、園長、小学校長、他市町村関係者等	「これからの幼児教育と小学校教育の在り方について」（田村学氏）と「幼保小の架け橋プログラムの大館市の取組状況について」の事例発表。
8月2日	大館市教職員夏季研修会	対面	大館市教職員、園職員等	「幼児期～小学校低学年の言葉の発達について」の講話。
1月9日	大館市教職員研究実践発表会	対面	大館市教職員、園職員等	有浦小学区におけるメディアコントロールへの連携した取組についての発表。「生涯の学びを支える『幼保小の架け橋プログラム』～成果と手応え～について」の講話。へき地保育所の実践発表。
2月18日 13日	大館市保育実践発表会	対面	園職員、小学校職員等	「生涯の学びを支える『幼保小の架け橋プログラム』～成果と手応え～について」の講話。へき地保育所の実践発表。
令和6年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
5月8日	4・5歳児担任研修会	対面	4歳児・5歳児担任等	「幼児の充実期を支える保育を一緒に考えよう」講話と演習。
5月14日	保育園主任研修会	対面	主任等	「架け橋カリキュラムを保育計画へ生かす」講話と演習。
5月21日	こども園主幹研修会	対面	主幹等	
5月24日	幼保小連携推進会議	対面	副園長・主幹教諭・主任、小学校教頭等	「幼保小の架け橋プログラム調査研究事業について」の講話。幼保小の架け橋プログラム大館市モデル地区の実践発表。学区ごとのカリキュラムの確認と連携の年間予定の協議。
5月30日	幼保小担任研修会	対面	5歳児・小1担任等	「幼保小の架け橋プログラム調査研究事業について」の講話。学区ごとのカリキュラムの確認と連携・交流活動の具体についての協議。
7月31日	大館市教職員夏季研修会	対面	大館市教職員・園職員	「通常学級における特別な支援が必要な子どもの理解と交流」

			等	と「発達障害のある子どもの理解と対応」についての講話。
1月8日	大館市教職員研究実践発表会	対面	大館市教職員・園職員等	「幼保小の架け橋プログラムモデル自治体としての取組～3カ年の成果と教育的効果への期待～について」の講話。公立保育園の実践発表。
2月13日 14日	大館市保育実践発表会	対面	園職員・小学校職員等	「幼保小の架け橋プログラムモデル自治体としての取組～3カ年の成果と教育的効果への期待～について」の講話。認定こども園と公立保育園の実践発表。

<研修の成果と課題>

【成果】

- ・実践発表として、または講話の中で、小学校区で実際に取り組んだ幼保小の交流や幼保小連携した活動を紹介したことは、他小学校区の取組の参考になり実践につながっている。一つの例として、R5 大館市教職員研究実践発表会での有浦小学校区の実践発表では、受講者の感想として「幼児期からのメディアコントロールの必要性をとて感じた。小学校から始めたのでは遅いので、是非参考にして実践化していきたい」という感想が多かった。R6年度は、多くの小学校区が幼保小で連携して、保護者を対象にしたメディアコントロールの研修に取り組み、架け橋期のカリキュラムにも明示している。
- ・大館市教職員夏季研修会・大館市教職員研究実践発表会で保育の実践発表を受講した小学校の先生方の感想として、「子供の姿からその行動の価値や成長を細やかに見取っていて驚いた」「遊びが子供を育てることを再認識した」「小学校入学までに子供たちがどんな力をつけているのか改めて確認したい」などがあり、保育や架け橋期の子供に対する理解が深まっていると言える。
- ・幼保小連携推進会議と幼保小担任研修会は、年度の初めのこの時期に交流や活動の具体的な計画を立てることにより、確実な実践につながっている。特に R6 年度は、架け橋充実期のカリキュラムに基づいて交流や活動の内容まで吟味し見通しをもつ小学校区が増えた。
- ・「架け橋プログラムの実施に疑問をもっていたが、モデル地区の子供たちの話し合う様子や伝え合う姿を見て、子供たちが成長しているのを実感し、やってみようという気持ちになった」「就学後は座学中心で、就学前教育・保育施設とは別世界…プツリと切れてしまいうイメージだったが、架け橋プログラムのおかげで育ちのつながりを実感できた」等々の感想から、研修を通じて幼保小連携の必要性や有効性を伝えることができた。

【課題】

- ・園からは「交流に関して、小学校の先生方との温度差を感じることがある」「小学校の先生方にももっと架け橋プログラムについての研修会に参加してほしい」との声があり、小学校側の幼保小連携に対する理解がまだ十分とは言えない。
- 年度の異動により初めて架け橋プログラムに関わる小学校教員の理解度に応じて、小学校長から年度初めに全教職員に向けて職員会議等で架け橋プログラムへの取組についての説明を依頼する。

5-2. 教材等の作成

＜作成した教材等の概要＞

【令和4～6年度】

◇幼保小連携だより「つなぐ」

発行：月1回の発行（A3版両面）第17号～50号

対象：市内全園・小学校・関係機関へ1部ずつ

目的：カリキュラム開発の手順、ひな型を示す。

- ・現場の好事例を普及することで、実践を普及する。
- ・随時、事業の進捗状況と、今後の見通しを示す。
- ・事業に係る連絡、提出期限やメットなどを周知する。

→全ての関係者に説明することは不可能なので、広報誌による周知を図った。

▲園内・校内の回覧となるため、目に触れない職員もいる。特に、管理職には目を通してほしいことを強調した。



【令和4年度】

◇ワークシート「幼保小連携年間計画 提出用紙」（5月配付・毎年使用）

- ・1年間の幼保小交流に向けて、5月の幼保小連携推進会議で提供し、この後の交流時に活用してほしいことを伝える。せっきくの話合いの場が子供の情報交換だけで終わることなく、具体的な交流の計画まで進むように、後日、小学校の教頭から教育委員会へ提出とする。

◇ワークシート「交流打合せシート」（5月配付・毎年使用）

- ・小学校が企画して5歳児を招待するだけの交流ではなく、双方のねらいの基に実施されるよう、本シートの活用を促した。指導案を合同で作成することもあるが、気軽な交流の場合には、簡易なシートでもよいこととした。

◇ワークシート「子どもの学び発見シート」（5月配付・毎年使用）

- ・保育・授業参観が見っぱなしにならないように、参観のポイントを示すことや子供の育ちに着目して「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に照らし、気付いたことをメモしていく。それを元にして、午後の研究協議に参加するなど役立てる。

◇DVD「子どもたちの育ちと学びに架け橋を」（3月発行、活用は2年目）

- ・初年度の3モデル地区の保育・授業、交流活動を足繁く取材し、映像資料として蓄積した中から、本事業で目指す子供の姿や保育・授業改善につなげるためのイメージをモデル地区以外の園や小学校、地域や保護者にも広げるための資料として作成。20分の映像で、2年目からの研修会で活用した。

<内容>

1 まず大人がそれぞれの持ち場から架け橋をかけよう

- (1) 互いの教育・保育へ架け橋をかけよう
 - ①小学校教諭の保育体験
 - ②保育教諭・保育士の生活科授業体験
- (2) 先生たちの協働で授業作り（生活科協働授業）
- (3) 願いや意図をカリキュラムに込めて

2 子供たちの活動・交流に架け橋を架けよう

- (1) 子供たちの交流活動〔行事〕
- (2) 子供たちの交流活動〔生活科 体験入学〕

3 子供たちの育ちと学びに架け橋をかけよう

- (1) 集団の生活を通して共感的協働力を育てよう
 - ①クラスとして一体感を味わう、仲間意識を育む
 - ②自分が集団の中で役割を果たす、役立つ喜びを味わう
 - ③言葉を通して、仲間との関係性を築く
- (2) 言葉を通して考える、学びを深める
 - ①言葉で伝える、言葉を届ける
 - ②自分の考えを言葉にする（小学校1年生）

エンディング 中学校の卒業シーン

「・・・、教育関係者、地域、家庭が「共感性」と「協働力」をもって、子供たちのよりよい育ちにつながる「架け橋」をかけましょう。」

◇「カリキュラム作成研修資料」（３月発行）

<内容>

- ・市としての作成方針
- ・大館市共通版「架け橋期のカリキュラム全体計画」
（５歳児～小学校１年生）
- ・モデル地区の実践
- ・「架け橋充実期のカリキュラム全体計画」
（５歳児１０月～小学校１年生７月）
- ・架け橋充実期カリキュラム 展開例
- ・架け橋充実期カリキュラム 交流事例
- ・架け橋期カリキュラム 実践例



【令和５年度】

◇架け橋カリキュラム作成の手順とポイント

- ・モデル地区の実践のプロセスを、モデル地区以外の小学校区へ、作業の手引きとして配付

<内容>

- ステップ１：お互いの生活や学びの様子、子供の育ちを知ろう
- ステップ２：期待する子供の姿」を共有しよう
- ステップ３：「具体的な活動や体験」を位置付けよう
- ステップ４：「環境の構成や援助・支援」「家庭との連携」を記入しよう
- ステップ５：架け橋期のカリキュラムをもとに実践しよう
- ステップ６：２カ年分の架け橋期のカリキュラムを完成させよう
- ステップ７：架け橋期カリキュラムの評価・見直しをしよう



◇「架け橋カリキュラム集」（３月発行）

<内容>

- ・架け橋期のカリキュラム作成のポイント
- ・架け橋期のカリキュラム活用・検証のポイント
- ・大館市共通版「架け橋期のカリキュラム全体計画」
（４歳児～小学校２年生）
- ・モデル地区版「架け橋期のカリキュラム全体計画」
（５歳児～小学校１年生）
- ・小学校区版「架け橋充実期のカリキュラム全体計画」
（５歳児１０月～小学校１年生７月）



◇小学校（1・2年生）各教科年間指導計画

- ・備考欄に「♡架け橋ポイント」（幼児期の体験など）を付記して、全小学校へ配信

令和6年度 第1学年 生活科 年間指導計画並びに実施記録 No. 1					
単元名／教科名 目標			予定 実時 時間数	備 考	
月	小・中・単元名／教科名	指 導 内 容			
		できごと わくわく 1ねんせい 目標：学校生活に関わる活動を通して、幼児期の教育での経験と思い起こしながら、学校の中学いたり、友達と関わりたりする。学校の施設の使い方や友達のよさに気付くとともに、友達や先生と学校生活を過ごすことの楽しさを実感し、安心して遊びや学習をしようとするところができるようになる。	全 年	● 新着ポイント (幼児期の経験例など)	●幼児期には、お楽しみ会などで友達と交流する機会を経験している。 例「フルーブスケット ハンカチ落とし いすとりゲーム ジャンけん列車 ジャンけん陣取りゲーム など」 ●幼児期の施設と中学校とで大きく違うのがトイレの設備。子どもたちが安心できる環境を工夫してほしい。
4	はじめまして きょうしつ	□1日目：学校の生の過ごし方や教室の使い方を覚える。 □2日目：名前をつけて自己紹介をする。 □3日目：校庭に出かけ、みんなで遊ぶ。 □4日目：教室や校庭で遊んだりして、友達と関わる。 □5日目：学校や校庭を歩いたり、大きな物を借りたりする。 □6日目：校庭について話し合ったり人数集めのゲームをしたりする。	8	●幼児期の教育で使っていた施設の共通点を思い出させながら、学校の中学いしたり、友達と関わりたりする中で、学校の施設の使い方や友達のよさに気付くとともに、友達や先生と学校生活を過ごすことの楽しさを実感し、遊びや学習をしようとするところができるようになる。 【知技】学校の施設の使い方や、友達のよさに気付いている。 【態度技能】幼児期の教育で使っていた施設との共通点を思い出せながら、学校の中学いしたり、友達と関わりたりする中で、学校の施設の使い方や友達のよさに気付くとともに、友達や先生と学校生活を過ごすことの楽しさを実感し、安心して遊びや学習をしようとしている。	
	はじめまして ともだち	□7日目：学校の中学いきなりで歩いてめぐる、見つけた物を見友達と話す。 □8日目：学校をめぐりて歩き回り、校庭で遊んだりして、見つけた物や遊んだことを絵に描く。		●全8時間＝基礎4 2/3（筆写2/3）＋基礎2＋音響1 1/3＋図工1 2/3＋体育4 1/3十道徳1＋学活5 としたように各科目・領域に渡る。	
	はじめまして がっこう	□9日目：学校の様子や通学路を確認して、学校の施設の様子や学校生活を覚えていく人々や友達、通学路の様子やその安全を覚えていく人々と自分との関わりを見付け、学校生活を覚えていく人々や友達のことが分かるように、楽しく安心して遊びや学習をし、安全に帰ることに力を尽くす。	全 日	●心算児の「思い出屋」などでは、自分のための行動や決断や自分から何かを表現するためのマナーなどについて自分たちで考えたり決めて、経験したことを選び伝えたりしていた。	
	がっこう だいじき	目標：学校規則や通学路確認を通して、学校の施設の様子や学校生活を覚えていく人々や友達、通学路の様子やその安全を覚えていく人々と自分との関わりを見付け、学校生活を覚えていく人々や友達のことが分かるように、楽しく安心して遊びや学習をし、安全に帰ることに力を尽くす。			



【令和6年度】

◇「架け橋スタートカリキュラム作成の手引き」(3月発行)

[illegible]

- ・ 架け橋期のカリキュラムを
基にしたカリキュラムとし
て、７年度の原案を、６年
度末の１年生担任が作成す
るよう配付。

- ・ 架け橋期のカリキュラムの「身に付けたい資質・能力」、小学校区の「共通の視点」「目指す子供の姿」との関連を意識して作成する。

◇架け橋カリキュラム集録（3月発行）

<内容>

- ・市としての方針
- ・架け橋カリキュラム実践のポイント
- ・改善・発展のためのチェックリスト
- ・大館市共通版「架け橋期のカリキュラム全体計画」
(4歳児～小学校2年生)
- ・小学校区版「架け橋期のカリキュラム全体計画」
(5歳児～小学校1年生)



5-3. その他の支援

<その他の支援の概要>

【小学校・園への支援】

◇会議への指導助言

架け橋調査研究委員会（3モデル地区 年3回程度）

架け橋カリキュラム作成合同会議（モデル地区以外の13小学校区 年3回程度）

◇交流活動、保育・授業の参観と指導助言

◇園内研修への支援

・園内の架け橋プログラムに係る研究発表等への支援

◇カリキュラム作成作業の軽減のための支援

・データ、枠修正、データ入力の修正等の技術面サポート

・実践やエピソード等得た情報は、取材や聞き取りをして架け橋コーディネーターが紙面に

【家庭や地域への周知・理解促進】

・5歳児健診における4歳児保護者全員への学習会講話

・就学時健診における5歳児保護者への講話、リーフレット（県教委）の配付

・その他、希望する園の保護者会への講話

6. 本事業に取り組んだことによる成果

6-1. 自治体における成果

<自治体における成果>

○架け橋コーディネーターが全17小学校区の交流活動やカリキュラム作成合同会議に出席し、随時の指導助言で完成までサポートした功績は大きい。また、カリキュラムのひな型や協議の進め方を具体的に提示することで無理なく、全小学校区がカリキュラム作成に取り組むことができた。

○広報や研究会での成果発表などにより、各小学校区での交流活動や保育・授業改善の価値付け、意味付けをすることができた。他地区の好事例を随時紹介することで、事業の理解・実践が促進した。

○小学校区ごとに共通の視点を意識した交流活動や取組がなされ、小学校区の課題解決への一助として期待される。0歳からの育ちを積み重ねていくことにより、市全体の教育の充実が図られてきている。

○廃園や学校統合により、組み合わせが変わったり、カリキュラムを修正したりする必要性が生じているが、目的に応じた新たな交流先との関係性を作った今年度の実績が先行事例として活かされていく。

○行政、特に市教育委員会がリーダーシップをとることで、入学期の授業参観を実施していた小学校は、1年目はわずか12%だったが、3年目には100%達成された。特に3年目には、カリキュラムを作成した小学校区内の園のみならず、出身園全部に案内を出す小学校が増え、色々な園との関わりが広がっている。

◆大館市「小学校への幼保との連携取組調査」（12月調査）

(%)

	令和4年	令和5年
園だよりや5歳児クラスだよりを職員間で回覧、掲示している。	94	100
スタートカリキュラムを作成し、職員間で共通理解している。	94	100
入学期の生活の様子を園の先生が参観している。	12	35
入学期の学習の様子を園の先生が参観している。	35	70
小学校の職員が保育参観に参加している。	100	100

6-2. 園・校における成果

＜先生方の指導と子供の姿の変容＞

【本事業取組前の保育・授業】

◇5歳児

- ・5歳児の遊びがクラス全体に広がることがなく、好きな仲間との遊びが中心になっている。
- ・保育者は「子ども主体」を尊重するあまり、保育者のねらいが曖昧になっている。
- ・ねらいに沿った意図的な環境の構成が少ない。また、季節や期のねらいに沿った知的な好奇心をくすぐる環境の工夫が不足である。
- ・言葉で伝えることができずに、友達とトラブルになったり、解決をすぐ保育者に委ねてしまったりする。

◇1年生

- ・スタートカリキュラムが、4・5月で学校生活への適応を急ぐものになっている。
- ・躰、学習訓練の徹底が重視され、一方的に教える時間が多くなっている。
- ・1年生担任が園での生活や遊びの状況を知ることが少なく、できないことを前提にたくさんの準備をしてしまう。
- ・入学当初は、「書く・読む」などの学習場面がほとんどないが、5月の運動会が終わると座学での学習量が急に増え学習進度が速まる。
- ・1学期から高学年と同じ授業スタイルを求める。気付きや感想など「書く」活動量が多い。
- ・担任の指示を待つ受け身の姿勢になったり、逆に、指示に従えずに注意を受けることが多くなったりする。

【本事業取組後】

◇小学校区としての変容

- 小学校区ごとに、複数回に及ぶ相互参観・合同研修やカリキュラム作成作業によって、気軽に話せる関係性ができ、対話から日常的な交流のアイデアが生まれ実現に向かっていった。子どもを真ん中に立場を越えた協働性が生まれ、関係者による主体的な取組が広がっていった。
- モデル地区はカリキュラムの実践により、小学校1年生の授業や5歳児の保育の改善、交流活動の充実が図られた。小学校区ごとの「共通して目指す活動・体験」が具体化され、子供たちが経験したことを生かしたり、1年生の学び方を真似たりしながら、主体的に学び、協働的に取り組む姿が見られ、カリキュラムの実践による子供の変容への手応えを得ることができた。
- モデル地区以外の小学校区では、モデル地区の先行事例、研修資料「カリキュラム作成資料」「架け橋カリキュラム集」を参考に、カリキュラム作成のために互いに子供の様子を見合ったり、教職員が共通の視点で語り合ったりする機会が増え、子供の姿や育ちの捉え方に変化が見られた。特に、小学校教諭の子ども理解、子ども主体の授業への意識が変わってきた。
- 双方のねらいに基づいた交流活動により、内容に深まりが見られた。1年生にとっては、5歳児との交流による他者意識が内発的動機付けとなり、自ら伸びる原動力となっている。子どもたちが変容していく姿を目の当たりにした担任が、カリキュラムを実現することの意義と有効性を実感した。
- 同じ小学校区にある園同士の横のつながり、交流が本事業から生まれ、園が違っても同じ大館の子どもを育てる意識が醸成された。
- 日常的に言語活動を意識し、サークルタイムで、自分の思いを臆せず言葉にできる子どもが増えた。また、活動に見通しをもったり、振り返ったりすることで、次の活動への

期待や発展があり、学びに深まりが見られた。子供の思いを軸に据えた遊びや授業展開がなされている。

○管理職が本事業の意義や価値を認識し、覚悟をもって取り組んだことにより、これまでできないと思っていた交流や改革の実現につながった。

◇園・小学校の自己評価から

○複数回にわたる交流や打ち合わせ、振り返りにより、交流や連携のわくわくするアイデア、気軽な交流が生まれた。

○顔が見えるおつきあいで「仲間意識」「主体性」、大人の「共感的協働力」が生まれた。

○異質な文化が会うことで、自ら気付く場面が多く、自らの保育・教育の見直しにつながった。

○「子ども」を中心に据えた幼保小中教育の「融合」へ広がりがみられ、学区の課題や目指す子どもの姿を共有し、共通の取組へとつながった。コミュニティースクールとしての取組にも発展できた。

◇園の変容 * 5歳児担任の自己評価から

○カリキュラムに示された「資質・能力」や「10の姿」への意識するようになった。

○興味関心をもったこと、やりたいと思ったことに存分に組み入れる意図的な環境の構成と援助をしている。

○子どもたちが考え、判断しながら、遊びを創るための援助や振り返りを充実させようとしている。

○状況に応じた関わり方、精選された言葉かけを心がけている。

○卒園がゴールではなく、0歳児から小学校・中学校へとつながる広い視野をもてるようになった。

○園内で話題にすることで3歳以下の担任の先生方も「架け橋」の意識をもつようになっている。

○5歳児の育ちの姿は、下の年齢児の遊びにより影響している。

◇5歳児の変容 * 園長等の自己評価から

○友達の考えを受け入れ、生かしながら一緒に工夫するなど遊びの充実が図られた。

○1年生の「おおだて型授業」の学び方を真似て遊びに取り入れる姿が見られた。

・「やることリスト」「設計図」（見通し）

・「〇〇タイム」で、振り返りで改善点やもっとしたいことを話す

・友達や年下への気遣いや励ましの言葉かけ

○共通の目的に向かって意欲が継続するようになった。

○何か困ったことがあると、友達と相談する、話し合って決める、協力して進める姿が見られる。

○「小学校の校舎も、知ってる先生も先輩も居る」は大きな安心感につながっている。

◇小学校の変容 * 1年生担任の自己評価から

○園生活や就学前の育ちを知り、発達を意識した指導や援助が意識されている。

○子供一人一人の違いを尊重する姿勢、肯定的な見方、言葉かけが増えた。

○成功させるための準備よりも、思いや願いの醸成を重視している。

○子供が話したくなる雰囲気づくり、考えたくなる仕掛け・授業展開を心がけている。

○教えるのではなく「何だろう？」「どうしようか？」と子供から引き出す声かけができるようになった。

○交流での子供の変容から、他者意識による主体性や意欲など交流の効果を実感した。

○子供の声（知的好奇心、気付き）から組み立てる授業・単元構想を心がけている。

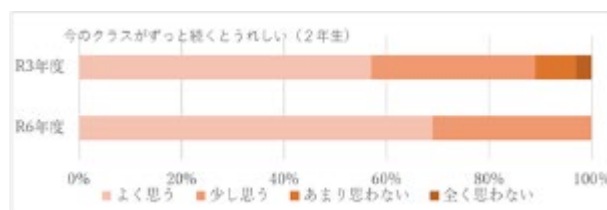
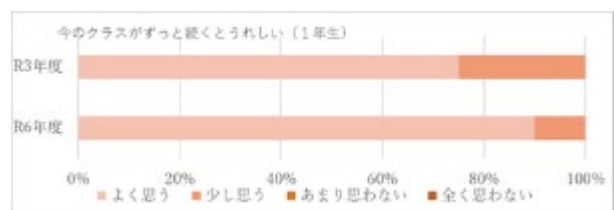
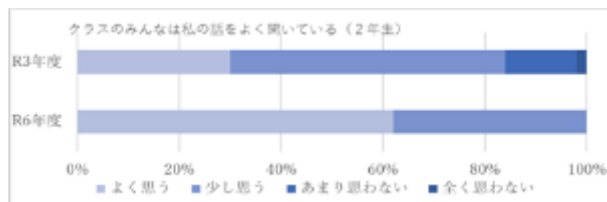
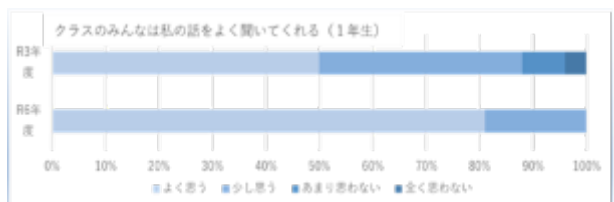
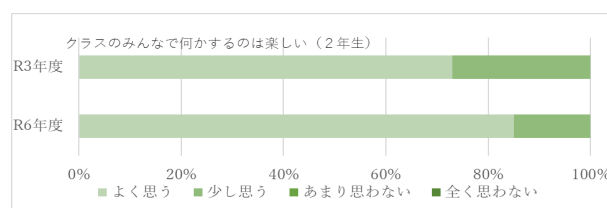
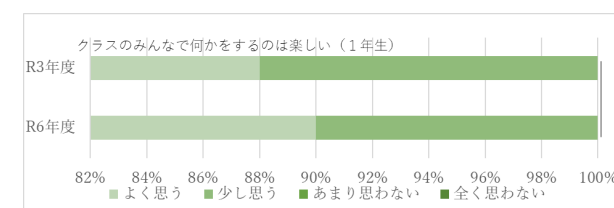
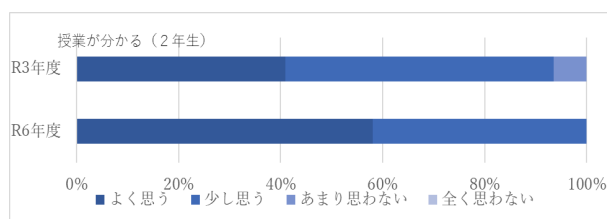
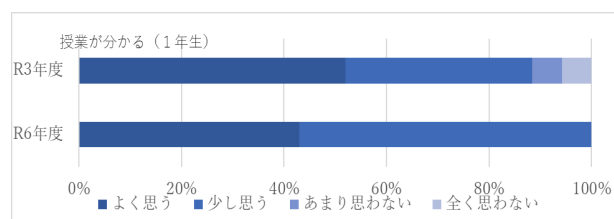
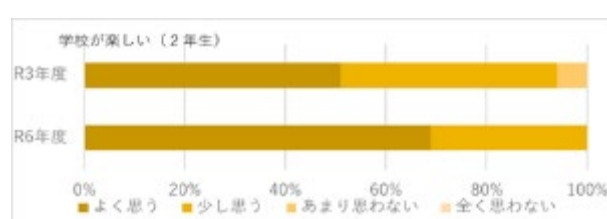
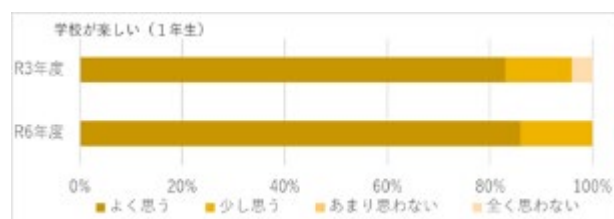
○試行錯誤の時間、待つ姿勢を大切にできるようになった。

○常に「共通の視点」を意識して指導するようになった。

◇ 1年生の変容 * 管理職等の評価から

- 就学前の振り返りの経験により、自由に自分の思いや考えを言葉で伝えられる子供が多い。
- 自分たちで決める、考える、伝えるという学びの主体性をもっている。
- 友達の言動を肯定的に受け止め、最後まで聞き取る姿勢があることから、共感的な学級の雰囲気ができている。
- 年下への気遣い（褒めて認めて自信を持たせる言葉かけ、アドバイスの仕方）がある。
- 朝の読書タイムなど、静かに集中することができる。
- 振り返りの話し合いから、次への見通しをもち、計画や予定を立てることができる。
- 問題発生、トラブル発生時こそ、知恵を働かせて団結して向かう頼もしさがある。
- そうじ、後片付けの素早さ、生活面のたくましさに感心することが多い。
- 交流を重ねる毎に、他者へのやさしさ、自らを律する姿が見られ成長を感じる。
- 話す・聞くのメリハリがしっかりしている。

◆ 「いじめ・問題行動調査」の児童質問調査 モデル地区の1小学校 R3とR6の比較
調査人数：R3 1年生24名、R6 1年生21名、R3 2年生37名、R6 2年生26名
調査時期：11月末～12月



<保護者の反応>

◇1年生の保護者の感想

- ・1年生と5歳児が活動する様子を初めて参観しました。よい意味で、どの子が1年生・5歳児なのか分からないくらい自然な関わり合いができていました。子供たちの思いを大切に、伸び伸び生き生きした交流の場をつくっていただきありがとうございます。
- ・幼保小連携を通して、子供たち同士の意見の出し合いや責任感など様々な力が育っていると感じました。大人が決めてしまえばすぐに進むことを、あえて子供たちに問いかけ話し合わせることで「考える」「協力する」ことにつながっていると思いました。これからもたくさん機会をつくってほしいと思います。
- ・子供たちがめいっぱい身体を使って、生き生きと雪の中で遊ぶ姿が可愛らしくもあり、逞しくもあり、元気をもらいました。何より感動したのは、自分が負けても誰かを精一杯応援できる姿でした。今回の参観では色々な場面で、子供たちそれぞれの優しさや思いやりに触れる事ができ、とても心が温くなりました。

◇5歳児の保護者の感想

- ・こども園内だけの活動と違い、年上の友達と遊ぶことができ楽しそうだった。また、小学校の生活がどのようなものかイメージでき、不安が少しずつ解消されてよかった。
- ・家庭では見ることのできない我が子の様子を見ることができるので、機会があったらまた参観したいです。

【要因】

- ・日常的な情報発信（玄関掲示、HPやSNSでの発信、降園時の会話等）
- ・交流活動の参観
- ・保護者会の講話による理解の促し

→事業以前と取組自体は変わらないが、それを伝える園や小学校の理解度と熱意が保護者に伝わった結果と考える。

【成果】

- 保護者へ活動やその目的を随時伝えたり、幼保小交流活動の参観の機会を設けたりしたことで、架け橋期の育ちの重要性や発達過程を意識して我が子の成長を見る保護者が増えてきた。
- 事業の市全体への浸透により、保護者だけではなく、地域の関わる関係者が増え、中学校区、コミュニティスクールの取組へと拡大している。
- 本事業を通して、架け橋期の育ちの重要性、「子どもも大人も共に育ち合う」意識が醸成される見通しもつことができた。
- 保護者、地域の方にとっても、子供たちの健やかな成長の姿は、喜びであり、ウェルビーイングにつながる。

7. 今後の課題と展望

モデル地区以外の14小学校区では、令和7年度からカリキュラムの完全実施となる。モデル地区以外の幼児教育施設における関心や意識は高いが、小学校においては架け橋期の教育・保育の重要性の理解は進んできているものの、教職員の意識や取組には未だ温度差があり、架け橋コーディネーターによる小学校側への支援が必要とされる現状である。また、幼児教育施設においても、架け橋期のカリキュラムを保育に具現化するためには、保育アドバイザーや架け橋コーディネーターによる園内研修への指導や支援が来年度以降も必要である。

小学校においては、架け橋期のカリキュラムを具体的な授業改善につなげるために、スタートカリキュラムの改善・充実が必須であり、令和7年度から市として研究実践に取り組む予定

である。

また、架け橋プログラムの推進体制として、これまで架け橋期のカリキュラム作成に向けた開発会議を年3回開催し、市としての研究推進、各小学校区の取組状況への指導助言を得てきたが、令和7年度以降も委員の構成を変えて、カリキュラム開発から検証に力点を移した内容で継続していく。

全小学校区で、完成した架け橋期のカリキュラムを運用し、実施状況を各小学校区での架け橋会議において検証・評価していくことで、より実効性の高いカリキュラムへと改善が図られ活用されていくものと思われる。あわせて、毎年的人事異動により架け橋期の担任が代わることから、架け橋期の保育・教育の改善、連携の意義、カリキュラム活用に向けた研修会は、毎年、年度初めに開催する必要があるとあり、行政のリーダーシップによるところが大きい。

幼保小の架け橋プログラム調査研究事業の採択自治体の本市の取組は県内市町村への影響が大きく、架け橋期のカリキュラム完成後の実践、検証や改善、それによる架け橋期の子ども姿の変容、家庭や地域への啓発についても注目される場所である。これまでの成果の発信に加え、カリキュラム完成後の実践を先行的取組として事例や成果を積極的に提供、公開する役割を担っていきたい。

8. まとめ

幼保小の連携は、本市においては10年以上前から取り組んできたものの、子供の育ちと保育・教育を本質的につなぐことはできなかった。本事業を通して、カリキュラム作成という1つの作業を幼保小の関係者が同じテーブルで行ったことが相互の保育・教育の理解につながり、そこから架け橋期ならではの生活や学びが新たに見えてきた。それを架け橋期のカリキュラムに落とし込むことで、本市なりのカリキュラムができたと言える。ただし、人事異動により、関係する担任個々が本事業の目的やカリキュラムの内容を理解し、実感するには半年はかかるため、数年の実践を積み重ねなければ、園や小学校において「当たり前」として定着することは難しいと考える。何よりも、人事異動の時期が架け橋期のカリキュラムにおいて重要な時期であることが、毎年、研究が積み重ねることを難しくしている。行政の粘り強い働きかけと、仲立ち、そしてサポートしながらも園や小学校の主体的な動きを待ち、それらの好事例や子供の育ちを評価し、価値付ける役割が重要である。

園と小学校の文化の違いは根強く、両方の状況を知っていて通訳する役、架け橋コーディネーターのサポートがなければ理解し合えない部分もあったと感じた。

保育・教育養成大学等の教育課程にも、架け橋プログラムの内容を位置付けるなど、これからの世代には知識となって身に付いていることが望まれる。

本事業を通して、園と園が連携する、交流するという事例があり、一番の成果と捉えている。これは、同じ目的をもって共に研究実践をした賜である。横の連携があつてこそ、市全体としての実践の足並みもそろっていくものと思う。

大人が子供の育ちを真ん中にして話し合い、実践していく中で、子供の育ちや変容に触れた時、大人の誰もが幸せな気持ちになった。その嬉しさが次の連携や実践へつながっていった。

研究のプロセスで様々な壁や一筋縄ではいかないことが多々あったが、「働き方改革」や「新規事業への負担感」より子供の育ちの喜びが勝り、教育者である私たちはこの姿を目にするために職についていること改めて感じた3年間だった。